

「今、私の晴雨計は！」^⑮

「ウズベキスタンの空を見上げて」²

平山征夫

私がウズベキスタン旅行に行きたいと思ったのは、かつてのシルクロードを辿りたいとずっと願っていたこと、ソ連支配から一転その崩壊からある意味独立を余儀なくされた中央アジア諸国の現状を見たかったからだ。

ウズベキスタンは、チムール帝国が滅んだ後、ウズベキ族の侵入などあり、ハンと呼ばれる国が鼎立していたが、一八六〇年代以降ロシア帝国による中央アジア征服が進み、植民地化していった。一九一七年のロシア革命により

白軍と赤軍の闘いの場になったりしたが、最終的には一九二四年ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国となりソ連邦の一角となった。しかし、一九九一年ソ連の崩壊に伴いウズベキスタン共和国として独立し現在に至っている。

独立後はソ連の国营工場が引き上げるなどの中、市場経済にいきなり抛り出され経済的自立への苦悩が続いている。ソ連時代主力産業として発展した綿花栽培も、無理な増産が響き、地球上四番目の水面積を誇っていたアラル海を干上がらせ、深刻な環境問題を惹起してしまった。しかし、ソ連の支配に対する評価は思ったほど悪くない。大国の力で工場が来て、働く場が出来て、病院や

学校も良くなったということだ。悪くはないのだ。ソ連が崩壊した後の方が混乱し、困ったという。

幸い天然ガス、石油、石炭、金、ウラン、希少金属などが豊富なことから外資を導入して、資源開発政策を推進し近年高成長を達成している。そのため何もない赤土の砂漠のような処に資源開発の街が建設され、労働者向けの住宅が建設されている。バスの中からの風景を見て「都市計画などなさそうだが、大丈夫か」と感じた。それでも一人当たりGDPはいまだ二、七〇〇ドル弱で、発展途上国から抜け出せずにいる。貧困の克服が国の最大課題だ。

アフガニスタンと国境を接し緊張を強いられているが、訪れた

ブハラ、ヒヴァ、サマルカンド、タシケント等では、国内外からの旅行者で賑わっていて治安に不安は感じないが、かつてテロ事件が発生している。特に二〇〇五年のアンディジャン事件では民主化の国民運動を武力で制圧、多くの死者が出たと言われているが、政府は「テロ活動を武力で制圧しただけ」として、国連、欧米諸国の人権問題との指摘を無視している。こうした非民主的政治背景にあるのがイスラム・カリモフ大統領による独立以来の長期独裁政権だ。ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国時代の最後の大統領だったカリモフがそのまま共和国大統領に立候補、当選した。選挙自体に対し欧州安全保障協

力機構等は疑問を寄せている。問題は当初一期五年、二期までというルールを七年に延ばしたり、再選を繰り返したりして独立後二十五年の今も大統領を続けていること。隣の大国ロシアそっくりなのだ。真の民主化はまだ遠い。

でも人々は中央アジアの抜けるような空の青さのように明るく屈託がない。特に子供たちは人なつっこくて可愛い。ウズベキスタンで公用語がウズベク語に近年一応定められたが、ロシア語もタタール語もクルド語も飛び交っている(らしい)し、あまり公用語を意識していないようだ。ガイドのジーナさん(白系ロシア美人に見えたが、ウズベキ人とタタール人が両親で、父親の人種を名

乗るのでウズベキ人とのこと)にそのことを聴くと「一つの言葉に決めるより色々な言葉が話せるほうが良いじゃないですか」とのこと。流石シルクロードの国だ。だから中高生は英語も少し話せるようで、我々を見ると話しかけてきて「日本人ですか。一緒に写真を撮ってもよいですか」と聞かれる。民族が入り混じったこの地域の娘さんは美人だらけだ。そんな美人、しかも高校生ぐらいの若い女性に囲まれて写真に納まるのだからこの国が好きにならな

いわけがない。
この国は親日的である。しかも子供たちは母親から「日本人のよ

うな勤勉な人になりなさい」と言われて育つという。首都タシケントに日本人墓地がある。終戦後中国東北部等から二・五万人余の日本人捕虜がウズベキスタンに連れて来られ、鉄道・道路建設、森林伐採等に従事、過酷な労働・氣候条件のもと八八四名がこの地で亡くなられた。この墓地にはタシケント市内で亡くなられた七

九名が埋葬されている。綺麗に整備され、後日鎮魂のため植えられた桜の木に囲まれたこの墓を三代に亘って守ってくれている現地の人がおられたのには頭が下がる思いだった。新潟出身の二人の方の墓もあり、片桐定平、丸山末松という名が刻まれていた。新潟にご遺族はおられるのだろうか。どんな思いで亡くなっていったのだろうか、頭を垂れご冥福

を祈りながら思った。そしてウズベキスタンの青い空を見上げ、「抑留者もこの澄み切った青い空を見上げ、一息つきながら故郷の空を思いだしていたのだろうな」、ふとそんなことが頭をよぎった。

(平成二十八年七月十一日)